

(参考資料)

第4回翻訳者育成事業（翻訳コンクール）講評

○英語部門審査講評

小説部門の課題文、古井由吉「辻」は、ムージルやブロッホの翻訳者でもあった古井が、屈折した、重層的な文体でもって、「家」や「父・息子の対立」という伝統的モチーフを、外界と内界とが錯綜する精神のドラマとして仕立て上げた作品。主語や人称代名詞の用法・設定、時制や時間構成などの一ひねりも二ひねりもした凝った意匠を、込み入った、変幻自在の長いセンテンスを、いかに首尾良く訳出しようかが問われる。一方、評論・エッセイ部門の小沼丹「梨の花」ほかは、平明な語り口ながら、その微妙な、とぼけた味わいを異言語に移し替えるにはそれなりの困難が伴う。だらだら説明しすぎると妙味が失われてしまうし、と言って、説明を加えないとわからないところもしかとある。そのさじ加減が難しい。それぞれの小品の核に据えられた固有名詞の持つコノテーションを、いかに読み取り、どこまで訳出するかも問題となる。予備審査を通過した訳稿は力作揃いであったが、優劣を選別する機能も果たすという点では、この古井、小沼の組み合わせは、きわめて有効に機能したようだ。

満場一致で最優秀賞に選ばれたカトリーナ・アンダーソン氏の訳文は、今後この賞を目指す方々にとって一つの規範となるような、過不足のない出来栄であった。原文とのつかず離れずの距離感、バランス感覚に優れていて、訳文のリズムや流れもよい。課題文2つのスタイルがしっかり訳し分けられているところも評価できる。ただし、小沼の原文の飄逸としたユーモアの再現という点では、いささか不満も残った。優秀賞に選ばれたジョアンナ・デアー氏は、原文はよく読めていたし、訳者の力量を随所に感じさせる訳文であったが、ときに原文のセンテンスの順序を入れ替えたりして、過剰に説明的に翻訳してしまう傾向があり、古井「辻」原文の視点転換の妙や、小沼の俳味が見失われがちになるのが気になった。同じく優秀賞のリチャード・ラッツ氏は、かみ砕き方のうまい翻訳で、常に原意の明快でわかりやすい見取り図を提示しようとする姿勢は評価に値する。原文の意味の膨らませ方や、原文の描出話法の直接話法化、段落の切り分け方の変更などが、恣意的でありすぎるのが惜しまれる。

井上 健

審査を終え、今回のコンクールの翻訳対象に選ばれた作品、古井由吉著の「辻」と小沼丹著「珈琲挽き」所収の短篇小説五編は、課題作品として非常にふさわしい選択だと感じている。あえて指摘する必要もないくらい、古井由吉と小沼丹の文章はそれぞれまったく違う魅力がありながら、しかし、到るところに読者、翻訳者の想像力を試す「隙」があるという意味では、共通の要素がある。翻訳者が、一つ一つのことばに向かって、丁寧に、心を込めて、その意味や語感、気持ちを汲んでいかなければすぐに解釈が暴走しそうな箇所もたくさん見受けられるし、そうでなくても、どうしても「逐語訳的な」英訳では読者をごまかしきれない、訳文独自のスタイルをきちんと決めてそこに原文を照らしていくしかないような選択を迫られる文章もある。

カトリーナ・アンダーソン氏の英訳はどれも、作品の細部までよく読み込んでおり、納得のいく重層的な解釈を、表現力の豊かな、独創的な英語で表現している。自分なら、こんな訳は思いつかなかっただろう、しかし、いい訳だな、と何度も思いながら、読んだ。とても勉強になる訳文だった。

ジョアンナ・デアー氏とリチャード・ラッツ氏の訳文もまた、どちらもとてもいい文章、英語作品になっているが、デアー氏の作品は、少し原文に背を向けすぎているのではないかという感じを受ける箇所があった。もちろん、原文から離れる、距離をとる、というのは翻訳者の一つの技術である。しかし、横目でも、常に原文に目を向ける姿勢を保った方が、原文も読める読者には納得のいく作品になると感じる。ラッツ氏の訳文は、むしろしっかりと原文に向き合っていたのだが、細かいところで重要な誤解が幾つか見受けられた。そこはやや惜しいと思ったが、この人の訳文にも、いいところがたくさんあった。

マイケル・エメリック

今回のコンクール課題作品として選ばれた古井由吉の短編と小沼丹のエッセイは、これまでの審査委員会が提示した課題作と同様に難易度の高いものだった。それは言語面や複雑な文化的背景の理解だけでなく、2作それぞれ原作テキストに合った翻訳スタイルを生み出し、それを維持する努力が求められていたからである。3名の受賞者はこれらの困難にみごとな工夫と解決で対処していた。

優秀賞を受賞したリチャード・ラッツ氏とジョアンナ・デアー氏の翻訳には、優れた文学翻訳にみられる質の高さが多く示されていた。ラッツ氏の「辻」の表現は、古井の小説を照らし出す場所に対する深い感覚をつかみながら、物語全体のドラマチックな緊張感を保っていた。デアー氏による小沼丹の「梨の花」の翻訳は原作にあふれる魅力と心地よい博識を英語で表現している。二人の翻訳にはどの翻訳者にもありがちな誤訳や文体上の誤りが幾つかあるものの、両方とも感心すべき翻訳作品であった。

カトリーナ・アンダーソン氏の最優秀賞作品はほかの受賞者と同様に多くの優れた点を有しているが、一貫した正確さと巧みさで洗練された表現力が上回っており、最優秀賞として選ばれるに値するものだった。アンダーソン氏による「辻」の英訳はシンプルかつ簡明であり、古井の原作と正にぴったり合っている。

一例をあげてみよう。

He still felt the sense of rapture that had welled up when he had set foot on the road cut through the mountain. Behind him, more and more pale purple butterflies danced above the valley. Flocks of white flowers twinkled like stars amongst the dark groves. The high-pitched sound of the sea came at intervals.

(原文)

「切通しに入った時から始まった恍惚感(こうこつかん)はまだ続いていた。背後にいよいよ数を増して、薄紫の蝶(ちょう)が谷の上へ舞いかかる。暗い藪(やぶ)の中から白い星が群れて顫(ふる)える。潮の音が間を置いて甲高いように鳴る。」

これら受賞者3名が、原作の美しさと文化的背景をととても良く伝えるクリエイティブで魅力的な英語版を生み出したことを祝福する。すばらしい原作に対してみごとな出来栄となっている。彼らの翻訳を読み、それぞれが文芸翻訳家として活躍する未来を想像するのは喜びである。

スティーヴン・スナイダー

二つの課題作品どちらにも、翻訳上の課題がたくさんあったが、応募者の方々がそれらを乗り越えてさまざまな独創的な解決を見つけ、終わりまで頑張られたことに感心する。そして、受賞者もそうでない人も、難しい課題を終えるまで頑張ったという経験自体によって、翻訳者としての力が増したと信じている。その意味で、本当は応募者の皆さんに賞を与えたい。

審査するとき、私が何を標準にするかといえば、二つの柱がある。一つは正確さ、もう一つは文体である。予備審査を通過し、入賞を競った応募者の場合、正確さにはあまり差がなかったもので、主に文体で決まった。原文から生き生きした英語に翻訳ができていくかどうかである。

翻訳は移植のようなものである。優しく大切に植え替えると、新しい場所からまた芽が出て伸びることができる。正確さはもちろん、その上で翻訳された言語でも伸びてゆくかどうか重要である。伸びてゆけば、いわゆる生きている作品になり、読者に感動を与えることができる。

では、どうすれば文体をよくできるか。文法などの問題ではない。英語の文体を磨くにはなるべくたくさんいろいろな良い文章を読むこと、そして自分も文章を書くことである。それによって、耳 (ear) すなわち微妙な言葉の選択、リズムと音についての感覚が伸びてゆく。翻訳者になるためには、起点言語と目標言語、両方を最大限に大事にしなければならない。

ダニエル・ハーンというイギリスの翻訳者は、翻訳をよくするため何をすればいいか聞かれたとき、こう言った。「読むことです。たくさん読み、丁寧に読むことです。うまく書かれている文章はどうしてうまいのか、うまくない文章はどこがうまくないのかを考え、それを表現できるようになることです。」

ジャーニーン・バイチマン

○ロシア語部門審査講評

ロシアにおける日本文学の人気は、20世紀後半から今日までの少なくとも70年間にわたり、高まる一方である。社会主義下のロシアでは、とりわけ日本古典文学が好まれていた。というのも当時は、日本の現代作品の多くは、イデオロギー上の理由で翻訳できない状態だったからである。今では、日本で有名になった価値ある新しい出版物はすぐに露訳されるようになり、翻訳者はロシアの読者に現代日本文学の雰囲気、志、スタイルの変貌やその流れをできる限り伝えようとしている。

日本語・日本文化を専門にしている原文で文学を読めるロシア人は、おそらく、日本文学愛好者の中で最も優れた資格をもつ読者だと言えるであろう。今回のコンクールで、日本側からロシアの翻訳者に可能性が与えられたということ、一方ロシアからは30名もの応募があり、20代の若者が多数チャレンジしたという事実は、大変素晴らしいことだと思う。実際のところ優れた翻訳は数編あり、選考はかなり難航した。最優秀賞をエカテリーナ・コヴァリョーヴァに与えた理由は、その翻訳が2つの大きな長所をもっていたからである。私見では、コヴァリョーヴァの翻訳の第一の長所は、原文のきわめて深く詳しい検討にある。読み始めるとすぐ、それが緻密な検討の結果生まれたものであることが分かる。第二の長所は、独特なロシア語のスタイルにあり、そこには本物の文学性が感じられる。原文のスタイルの流れを把握した上で、エネルギーを放つ独特なロシア語の流れを創造することに成功していた。

次に、優秀賞の選考にあたっては、ヴェラ・ヴァリエヴァとマリア・プロホロワを選んだ。この2名の翻訳者もそれぞれ優秀な点を備えている。両者ともまず何より、原作者の個性を自分なりに伝えることを目指して努力していた。また、原文から受ける感覚を独自の方法で表現できたところにも、大きな価値があると思われる。

上記以外にも上質な翻訳が見受けられたので、奨励に値する作品として3名を選出することを提案した。他の審査委員の賛同を得ることができ、嬉しく思った。今後もこのコンクールは、ロシアの若い翻訳者・日本研究者にとって素晴らしい刺激になっていくことであろう。

リュドミーラ・エルマコーワ

古井由吉の文章（小説部門課題，以後A）にしろ，小沼丹のエッセイ（評論・エッセイ部門課題，以後B）にしろ，きわめて難解かつ高度な文体と内容を備えており，まさに翻訳者の真の実力が試される格好の課題文だったと考える。課題文Aは，私自身なんども熟読せざるをえなかったほど，時制，ナレーション，いずれもきわめて入り組んだ文体で書かれている。他方，課題文Bは，卓越した着想とユーモアに満ち，Aと比較してより読みやすいが，時代的雰囲気，頻出する動植物名など，日本文化の深い部分への理解を要求するテキストであることは間違いなく，別の意味でAに優るとも劣らない難度を備えていた。いずれにせよ，課題文のコンビネーションとしては申し分なかったと思う。

個別の審査にあたって，私の評価が二転三転した事実を率直に申し述べなくてはならない。課題文AとBのそれぞれに平均した実力を発揮した応募者もいれば，AとBとの間に若干偏りがあった応募者もいる。選考結果について述べると，今回の受賞者全員に対する審査委員四名の評価がほぼ一致したことは驚くべきことである。私自身は，当初，アンナ・グビンスカヤさんの流麗な訳に魅了され，第一位に推すつもりでいたが，審査の過程で若干意見が変わった。シェプキン・ワシーリーさんの翻訳を第一候補に考えた段階もあるが，課題文AB間のバランスの悪さが気になり，最優秀賞，優秀賞への推薦を諦めざるをえなかった。最終的には，総合的な見地から，ヴェラ・ヴァリエヴァさんを第一位に推した。ただし，最優秀賞を受賞されたエカテリーナ・コヴァリョーヴァさんやマリア・プロホロワさんとの間に，決定的といえる大きな差異は見られないというのが率直な感想である。付言すれば，コヴァリョーヴァさんの翻訳は，ABともバランスがとれ，その注の付け方も含めて翻訳者としての誠実さを感じた。その意味でも将来さらに伸びる素質を備えた方だという印象をもった。

奨励に値する作品として選出されたグビンスカヤさんについて改めてひと言述べておく。当初，私は，この応募作品の評価をめぐって審査委員会の意見が割れるのではないかと考えた。事実，私が，高く評価したリズム感，端正さ，プロフェッショナルな流麗さについては，これを必ずしも高く評価しない意見もあって結果としては奨励作品となった。流麗さの点で，Aのリズムをよく伝えてはいるものの，逆にリズムへのこだわりが細部のディテールの再現に結びつかないという側面があった。総じて，予備審査を通過した応募者全員が，それなりに内容をかみ砕き，それぞれに個性あふれる文体で翻訳されたことに対し，心から驚きを禁じ得なかった。時には，**bookish**（ブッキッシュ）に過ぎたり，直訳が目立ったり，全体のリズム感を欠いたりという側面もあったが，課題文次第では，それぞれがまた別の可能性を発揮したかもしれない。いずれにしても，ロシアにおける日本語受容のレベルの高さを改めて知らされた思いである。

亀山郁夫

第4回J L P P 翻訳コンクールは、小説部門、評論・エッセイ部門のどちらの課題も易しいものではなく、それだけに翻訳者の力量をはっきりと試すものになったと思う。古井由吉「辻」は、現代日本散文の極北ともいふべき密度の濃い文章で、日本語特有の柔軟な構文を駆使し、厳しく簡潔な表現の中に多くの複雑な陰影を盛り込んでいる。課題作品選定にも携わった側として率直に言えば、「難しすぎたかもしれない」と後悔しかけたほどだったが、実際に応募作を読み進めるうちに、予想以上の喜びを味わうことになった。この難しいテキストに取り組んだ若い応募者たちの努力に胸を打たれたからである。かつてドナルド・キーン先生は別の翻訳コンクールの席で、「課題文は難しい方がいい」と主張されていたが、その意味が今回はっきり分かった。

他方、小沼丹の達意の随筆は明快で面白く読めるのだが、翻訳者にとっては別の意味で大変難しいテキストだった。表面的な意味だけ取って訳しても、ちょっととぼけたような飄々たる諧謔味がまったく伝わらないのである。ユーモアはかくも文化的なもので、特に翻訳が難しい。また動植物の名前が頻出するのも日本の随筆ではごく普通のことだが、これがまた翻訳者泣かせである。日本でごく普通の鳥がロシアには存在せず、いったいどのような名前を当てればいいのか、あるいは訳注で説明するべきかなど。翻訳者の悩みは尽きない。

このような課題の難しさを考えると、今回の応募者総数は決して少ないものではないだろう。また審査の結果、最終候補に残った応募者がすべて、これから活躍が期待される若い世代だったことも、非常に喜ばしい。ロシアにおける日本文学への関心の高まりと日本語習得の高い水準を端的に示すものである。

審査の際には、誤訳の有無とか、細部のミスといったことよりも、全体として翻訳がロシア語作品として成り立っているか、ということに重点を置いて検討した。最優秀賞に選ばれたコヴァリョーヴァ氏の翻訳は、原文を読み抜いたうえで、逐語的な対応ではない適切な表現をロシア語に探し出すことに成功している。ヴァリエヴァ氏とプロホロワ氏は語彙の選択や注の付け方などの点で改善の余地があると思われたが、しなやかな言語感覚でそれぞれの持ち味を發揮して「読ませる」翻訳作品に仕上げていた。嬉しいことにそれら受賞三作以外にも、甲乙つけがたい優れた応募作が多く、さらに3名の方を奨励に値する作品として選出することになった。椀飯振舞のように見えるかもしれないが、実は若い翻訳者たちの努力の成果に元気をもらったのは、私たち審査委員の方だったような気がする。今回の受賞者たちが、今後、ロシアにおける日本文学の翻訳の新しい波を作り出してくれることを期待したい。

沼野充義

本コンクール（ロシア語部門）の応募者はよく頑張っていて良い翻訳は多かった。その面でJLP主催のコンクールは大成功になったと確信している。優れた翻訳人材の育成に大きく貢献する場であるに違いない。

課題作品はとても難しいものだったが、全体としての翻訳レベルはかなり高かったと思う。したがって、優勝者を決定するのはそんなに簡単なことではなかった。審査委員会はたいへん迷ったこともあり、最優秀賞と優秀賞とは別に奨励に値する作品も選んだ。

選択は難しかったが、受賞者を決定すべきということで、私としての意見では、最優秀賞に最も適える者はエカテリーナ・コワリョワだ。基礎知識が豊かな方で、日本語原文の理解は深く、ロシア語の文体も優れていて、リズム感があって、言語意味のニュアンスをよく感じている。全体としては高い文学性がある翻訳といえる。

そのほかの受賞者の翻訳には、それぞれ優れた場面と特長がみられるが、一貫性が少し不足しているところもある。しかし翻訳の経験と実践を蓄えることによって、必ず乗り越えることができると思う。

本コンクールは終わったが、受賞者はみんな若い人ばかりなので、先に広がっている道は長いだろう。これからも努力して実力を十分に発揮しながら優れた翻訳者になるように期待している。

最後の感想ですが、コンクールの応募者のなかでは男女のバランスが崩れている気がする。女性が圧倒的に多いということだ。今のロシアでは女性に文学の力があるという証明であるかもしれない。モスクワの出身である私にとっては応募者のなかにモスクワ在住の方がとても少ないこともまことに残念に思いうが、財政の首都と文学の都とは大きな違いがあると痛感した。

アレクサンドル・メシェリャコフ